

ペシャワール会報

No. 11

(From)
 Peshawar Kai
 1-12-8, Daimyou,
 Chuouku, Fukuoka
 -JAPAN-

PAR AVION
 BY AIR MAIL



To: Dr. TETSU NAKAMURA
 Hospital Peshawar,
 W.F.P. PAKISTERN

巡回診療車に
 名前をつけてネ!!

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ペシャワール通信(9)

中村 哲

お元気でしょうか。祈りの手紙や会計報告、遅れて申し訳ありません。年末年始の事務処理にわかれて、このところ眠る間もありませんでした。ということ、報告の遅れがちなこと御容赦下さい。

一九八六年度(1986・1・1〜12・31)の業務報告書を送ります。これはあくまでも病院あてのものです、そのままそちらで、私の病棟の仕事の理解の一助になるものと思います。この病棟の仕事と共に、実質的にはAfghan Leprosy Serviceで行っている仕事が、JOCSSに報告されるべき仕事内容ですが、後者の方は、年度末(日本)にまとめてお知らせいたします。

昨日1月17日は、ペシャワールとその近郊のキャンプからアフガン・ゲリラ各組織合同の集会在市内で行われ、数万人のゲリラ部隊が集結しました。各部隊共に、ロシアくたばれ/アメリカくたばれ/と口々に叫び、おそらくこれが一丸となれば軍によっても制圧不可能で、脅威を身近に感じました。外国人のジャーナリストは恐れて近寄れませんでした、何か新しい動きが本格的に始ま

ったことを感じました。人々は組織の枠を超えて動き始め、ペシャワールでアメリカの援助をうけながらぬくぬくと暮らしていた組織の幹部たちは身の凍る思いがしたでしょう。何かの終りの始まりです。集会は整然と行われ、大きな衝突はありませんでした。(犠牲者は数十人程度ですんだのではないかと思われます。)

平和は尊いものだということをしみじみ実感しました。日本はどうでしょう。いつも思い出の中心では美しいものしか浮んできませんが、案外片思いで、ここで目の前にみえる戦争や争いよりも、もっと厳しいものがあるのかも知れません。何か日本が本当に遠い国になったような気がします。なお、お陰でカラチのMAC(マリ・アデレード・らいセンター)本部からもJOCSSの仕事は一応の評価をうけ、西独からの援助も徐々に回復しているのではないかと思います。一九八六年は一応の目標を達したと思われますが、まだまだ本当はこれからというところです。

一九八七年一月一八日

お元気ですか。一月一八日付のお手紙でジープ募金一件落着の新聞のコピーをみましたが、大団円ですね。こちらの方も乗りものことでは四苦八苦していましたが嬉しい限りです。どうもありがとう。お疲れさまでした。ペシャワール会もさらに燃やされて一層意気があがっているところ



でしょうが、次の目標が待っておりますから、調子にのってハメを外し過ぎぬように。……とまらず、ペシャワール会の楽しい集いにうらやましくなり、水をさしたくなりました。(実は、ペシャワール会あつての自分だ、と頼りにしておるのです。)

丁度一昨日にペシャワール北方のバジョール地区でのsurveyから帰ってきたところですが、ハンセン氏病の、アフガニスタンにおける東の震源地であるクナール州出身者の調査を始めたところでした。バジョールはクナール州と隣接する自治区で、カイバル峠が閉鎖に近い現在、パキスタンからアフガニスタンに入る要衝となっています。調査は二週間たらずでしたが、国境から数キロメートルのところまでソ連軍の爆撃に遭遇し、脅威を身近に感じました。

バジヨールそのものもおそらくパキスタン北西辺境の中でも最も後進地帯で、ここ数世紀、人々の考え方も変っていないのではないかと思われる。イスラームと闘争だけが彼らの世界で、異教徒はまるで人間とは思っていないようでした。

新聞ではアフガニスタンからのソ連軍撤退がとりざたされていますが、ともかく現在のところ、国境における戦闘は少しも弱まっています。1月23日午前9時15分頃には、バジヨールのハール・バザールから北西方15キロメートルの地点が爆撃され、17機のジェット戦闘機がパキスタン領内に飛来しました。黒煙が間近にあがるのを見て、文字通り来るところまで来たと思いました。難民キャンプの状態はおそろべき貧困で、充分に国際援助が末端までゆきわたっていないことを改めて実感しました。

私も、らしい患者を追って、ようやく人々の苦悩の中枢部に到達し、西方にソ連軍という壁を実感しました。人々は戦争に忙しく、小型トラックに分乗してライフルや自動小銃をかかえて次々にクナール方面へ向っていました。それでも我々の来た目的を話すと親身になってよく協力してくれました。

以上のような次第で、早くジープが来ればなあ、とチームのメンバーと話していたところでした。キャンプは少し幹線をはなれると、大変辺ぴな所がありますから、今回もライトバン2台で、川を



山を越えるとアフガニスタン

越え丘をあがり、パンク、ブレーキの故障が少なく、必要性を改めて痛感していたところでした。

病棟の方はもち直し、ほほらしい診療に必要な全ての治療態勢はできあがりました。小さな40床の病院ながら、少ないスタッフでフルに動いています。一九八六年の病棟の仕事、統計資料を作成しましたので理解のため御参考下さい。これは病院とカラチの本部への報告書ですが、一応の参考にはなるでしょう。実際にはこれに加えてアフガニ人を対象とするフィールド・ワークがあります。数字はあくまでミッション・ホスピタルだけのものです。全体の私の活動報告は年度末にします。

教育ファンドは非常に有効です。現在、理学療法士(患者)、靴職人(患者)、及びその助手たち

(患者)に月々5000〜8000ルピー、計約3000ルピー(約25000円)を教育費として与え、さらに通学を希望するものには教材や入学費用を援助し、彼ら自身の自活への道を拓かせると同時に、我々の活動にも役立つよう配慮しております。これは将来的見通しから、不可欠且つ大変な恩恵になるでしょう。詳細は追って報告します。ジープ募金の後の次の目標にかかげてよいでしょう。

靴の方もよい評価を得るようになってきました。年間500〜600足くらいが無理のないところですから、これくらいだと会からでも支えられるのではいかと思います。

ともかく、善意の募金は確実に目の前で生かされております。ペシャワール会の活動は大変重要であると、自信をもって言うことができます。お互いに息切れせぬよう、楽しく続けて下さい。私はクリスチャンですから、ダシにされるのを喜んでいきます。(我々のことばでこれを「地の塩」と呼ぶのですが、これはみなさんにはどうでもいいことと、要するにこれでもいいのです。)問題は良いダシになることで、悲壮感をただよわせず、日常生活の中でできることを無理なく楽しくやってゆけばよいのです。

長くなりました。ではまた。どうぞお元気で。桜がもうすぐですね。花見には参加できぬのが残念です。では福岡で。昭和62年1月28日 中村哲

一ひとつの事故から一

ペシャワールに居て危険なのは何も機関銃や爆弾だけではない。先日、警官の誘導に従って車で三叉路を幹線道路に出たところが、猛スピードで直進してきたミニ・バスに激突した。急ハンドルをとつさにきつて大難をさけたが、助手席側は破壊された。安全地帯に停止したのを確かめて横に乗っていたアフガン人のドクターを見ると、幸いかすり傷程度で、折れ曲がったドアから飛び下りて相手の運転手の方に怒りをあらわに歩いて行くうとしていた。私はジャンパーのポケットに手を入れたが銃はなかった。

警官の方もまた一人であったから、自分の身の安全を確かめて、仲裁に入ってきた。本来ならば、警官の誘導を無視してつっ走ってきたミニバスの方が悪いのだが、ここでは日本で考えられるような法は通用しない。その場での力関係と金があるものをいうのである。群集と共に応援の警官が来てくれたのは幸いだった。バスの乗客のひとり私が日本人であるかわかると、「ノー・プロブレム。1000ルピーで済む。」と横合いを入れる。しかし、こちらは車を大破された上に金までとられるのではかなわぬ。

「パキスタンの誇る法と秩序はここにはないのか。」

この警官殿は何のためにここに立って交通整理をしているのか。それを無視したのは誰であるか。」と言いかえす。

相手のドライバーはまだ20才にもならぬ若いアフガン人であった。いざとなれば押しの強いアフガン人のドクターが機転をきかせて、ブルドッグがうなるように警官たちに命令口調で言う。

「こんなところで騒ぎを起せば君たちにもまずい。警官と当事者と三者だけで話せる場所へ車を移せ。」

幸い車は動いたので、数百メートル離れた場所へ移動して交渉が始まった。

免許証の呈示を求められた時から勝負は決っていた。私が「友邦日本」のお医者様であり、国際免許証に立派なネクタイ

姿の写真があること、相手のドライバーが正式の免許ではなく許可証しかない難民であることである。(実はパキスタンは国際免許の条約国には加盟しておらず、相手の許可証の方が法的には有力な筈であるが、そんなことはここではどうでもよいのである。)警官の方としても、どちらを金づるにするかは決まっていた。

「よろしいです。どうぞ行って下さい。後は何とかします。」



巡回診療の途中で

しかし、何とかすると言ってもドライバーから金をまぎあげるのが事後処理であるから、そんなことされるとこちらも腹立たしいし、後味が悪い。若いドライバーは脅えてしまっていた。大切なミニバス(ここでは車は人の命よりも大切なのである。)のヘッドライトをこわした上に、1000ルピー近くも脅しとられれば、その償いの金をためるのに一年はかかるかも知れぬ。免許とり消しになれば失業する。

「ドクター・サブ、どうしますか。あなたのお気持ち次第ですよ。」

とアフガン人のドクターが言う。

「どこのキャンプか知りませんが、私と同じ難民です。」

「彼がすみません、と素直に言えば忘れよう。」という私のことを早口のパシウトウ語で彼が伝えた。相手のドライバーは「イスラーム」を連発して数百ルピーで警官と事を済ませようとしていたが、ドクター曰く、

「イスラームとは何であるか。相手のことも考えずに神が喜ぶものか。金で事を済ませるのがイスラームならば何の益があるか。ドクター・サブは御

親切にも、被害を忘れようとおっしゃってくださるのだ。」

と吠えるように言った。

今度は警察官が金づるを失うまいとしたので話がややこしくなつたらしい。被害者たるわれわれが加害者を弁護するという妙な立場になつてきた。少しづつ群集が増えてきた。ペシャワールの西のはずれのこの地区は自治区のパターン人やアフガン人が殆んどであるから、これは多勢に無勢の警官には無言の圧力を意味する。頃合いをみて、

「もうよい。これでおしまい。兄弟、イスラムのよしみにて。過ぎたことだ。(水に流そう。)さようなら。サラーム。」

と抱ようの挨拶をして別れた。警官はポカんとつ立ってわれわれを見送って、一件落着となつた。壊れた助手席の車の運転は風通しがよいが、ペシャワール郊外の砂塵をまきあげて車内は快適というわけにはいかなかった。アフガン人のドクターが私に言った。

「この人間は無知な奴らばかりだから。警官の誘導なんかも気をつけて信じないがいいですよ。ここは日本ではないですから。」

「いやなに。命びろいしたと思えばやすいものだ。これから気をつけよう。」

アフガン・レプロシー・サービスの事務所に帰ると、喧嘩早いパターン人(アフガン人)の運転手が一部始終を聞いて、

「パキスタンのポリ公の野郎め。金さえとれりや誰でもイスラムの兄弟なのさ。」

と怒つて言った。確かに何かの交渉には必ず、
「イスラム」が住民の間で連発されるのを私は興味をもつて聞いてきた。例えば、ある時、チトールの山奥から連れて来られたらい患者の女性が居た。チトール語しかわからず、病院で危害を加えられるものと感違いしたらしい。すっかり脅えきつていた。その時にも大声で

「イスラムノイスラムノ！」

をくりかえして助けを乞うたことがあつたのを思い出した。その時は私をトルコ系のアフガン人と誤解していたのである。



「この対立社会をかううじてつないでいるものが、おそらくヘイスラムなのであろう。ヘイスラムとはこの住民にとつて何なのだろうと、柄にもなくふと興味を覚えて、パターン人のドレイバーに聞いてみた。

「イスラム、イスラムとみんな言つて話していたが、何のことだ？」

「ドクター・サーブ、馬鹿げたことですよ。イスラムでことが済まされりや、こんな目茶苦茶な世の中はないし、第一なんでみんな争つてるんです？ 結局、生活の方便に使っているのに過ぎないのさ。われわれだつて現に、イスラム教徒の故に苦勞のしづくめでさ。仏教国にでも生まれてりや、もつといい国になつたらうに。金が全てのアホらしい世界でさア、全く。」

これは全くパターン人らしい卒直な意見だった。しかし、このような発言はここでは禁句である。彼は数年前まではカブル近郊でゲリラ兵士として前線でバズーカ砲を手に闘つていたということ私をひそかに知つていた。これはそれでも、常識あるイスラム教徒自身の、言いくらいが一般的な感想なのである。

しかし、考えてみれば、「ヘイスラム」を「人間性」とか「民主主義」におきかえてみれば、程度の差はあれ、「私の眼からみて甚しい差ではあるが」本質的にペシャワールも日本も変わりはない。この無秩序なペシャワールという町に何か魅力が



おこさせるものがあるとすれば、極めて幼稚かつ陽気に、人間の持つている弱点と欠点が大手をふって歩いていることもその一つである。

大破した私の車は、思い思いのスピードで行く馬車やトラックや乗用車、羊や牛の群をくぐりぬけて走り、雑然たるバザールの修理工場へ運ばれて行った。

(一九八六年十一月)

Dr. 中村との電話連絡

急ぎの用件がある時は、国際電話を利用していただきます。電話は、ペシャワールでは貴重品、もちろん中村先生の家にはありませんので、ミツシヨン病院のウジャガー院長宅の電話を借ります。時差は四時間、直接ダイヤル通話ですと、回線にあまり余裕がないのか、しばしば混雑してつながりにくい。電話が通じて、ウジャガー院長の家で英語が分らない人が受話機をとると、そのままガチャリ、こちらの英語も問題ですが、なんとか通じて中村先生を呼んできてもらう間、三分、五分と「大丈夫かな、先生はいるかな」と案じながら待ちます。

「家に電話をつけたら？」と勧めると、「今でも忙しいのに、電話があるともっと忙しくなってしまう。」と中村先生。声ははっきり聞きとれるが、伝わるのに少し時間が掛かるのでゆっくり話さないと混乱してしまいます。電話料金がどんどん上がっていきますので、あせってしまいます。また、日本からパキスタンへの電話は比較的短い時間で通じるのですが、パキスタンから日本へはなかなか通じにくく、大変時間がかかるので難しいようです。

最近(三月一日)の電話の話から、「ソ連のアフガニスタンからの撤退がいわれているが、国境付

近の戦闘は激しさを増しているように思われる。

ペシャワールでも、しばしば砲声や銃声が聞かれる。パキスタン人とアフガニスタン難民との間のあつれきも増しているようだ。以前は現地の服装をしていると自分はアフガニスタン人に見られていたが、それが危険に思えてきたので、最近はおちんとした身なりをして、日本人らしくしている。仕事は、忙がしくて、睡眠時間が短くなっている。患者の調査を続けており、ペシャワール会から送ってもらった、パンチカードを使って整理をしている。スタッフの教育と靴工場の自立が当面の重要課題。ペシャワール会からの支援を期待している。」とのこと。

パンチカードを送る

ハンセン病患者の登録や、治療経過などを記録するためのパンチカード五〇〇〇枚を印刷して中村先生に送りました。

以前は日本でも、統計処理などにパンチカードが広く用いられていましたが、パソコンの普及にともなって、今はほとんど姿を消してしまいました。そのため、カードの印刷に手間取り、また、パンチを開けるはさみを見つけるのにも苦労しました。

邑久光明園の医師と 検査技師らペシャワール訪問

昨年暮れから正月にかけて、岡山にあるハンセン病病院の国立邑久光明園の医師三名と検査技師、およびJOC Sワーカーが、ペシャワールの中村医師を訪問して、事を助けてくださいました。昨年、ペシャワール会総会でハンセン病について講演してくださった小原安喜子医師（元JOC Sワーカー）と、同僚の熊野医師、吉野医師（元JOC Sワーカー）、松本検査技師、さらに現JOC Sワーカーでネパール・アナンダパン病院で働いておられる宮崎伸子看護婦の計五名が、正月休みを利用して、十二月二十九日から一月四日まで、ペシャワールに滞在、小原、熊野両先生はハンセン病患者さんの足の再建手術を中村先生に技術指導され、眼科の吉野先生は目の手術を、松本技師はらい菌検査をしてくださいました。また、宮崎看護婦はネパールでハンセン病治療に従事しておられますので、スタッフと交流を深めることができたこと。



松本技師は、二月二十三日から三月八日まで再びペシャワール・ミツシオン病院を訪問、皮膚のらい菌検査の仕方と所見の読み方を、スタッフに指導していただきました。感謝です。

若松から血液検査の 機械が寄付さる

北九州若松の、若松中央ロータリーが福岡県臨床衛生検査技師会北九州支部の協力で、自動血球計測器をペシャワール・ミツシオン病院に贈る準備をしておられます。

器械はすでに用意されています。また、この器械を現地に据付けて、スタッフに使い方を指導するために、福岡県臨床衛生検査技師会北九州支部の技師を派遣してくれることになっています。すでに、行ってくださる技師も決まっているとのこと、現在、中村医師と時期の調整をしているところです。

この件では、若松臨床検査研究所所長、寺尾伸一さんにお骨おりにいただいています。

美智ちゃん

誕生!

中村先生ご一家にニューフェース、昨年十二月六日、秋子ちゃん、健くんについて、女の子さんが誕生、お母さんともども元気だとのこと。「美智」ちゃんと命名されました。健やかに育たれますようお祈りします。

中村先生も大変喜んでおられますが、まだ美智ちゃんの顔を見ることができません。三月末にはご一家とともにペシャワールに向かう予定です。



ペシャワールの散歩道

(2)

仲道 卓

ナマック・マンデイ(塩市場)の朝は早い。僕はこのホテルのレストランは銀河という。地元の方にこのホテルのレストランは銀河という。地元の方にこのホテルのレストランは銀河という。地元のいい方では、月はスボッグメイ、銀河はケカシャーンとなる。ずいぶん想いの入った名だと胸の奥を少々くすぐられてしまう。

日の出前の静まった空気は、数時間後にはホコリの渦となつてしまふのが嘘のようである。その澄んだ大気に、朝の礼拝を知らせる詩(アザーン)が走る。アザーンに始まり、アザーンに終るペシャワールの時間の流れは、辺境といつつもイスラム世界に息づいている。日の出を過ぎればチャイハナは開く。だいたい朝メシはどこでも簡単なのだ。ここではナンとチャイ(茶)が普通の朝食である。ムライという乳脂肪をナンにつけてたべたりもする。

オートリキシャが迷惑な排気ガスを誇らしげに撒き散らす時間となつて街は動きだす。静けさのヴェールはとり去られ、欲望のスペクトルが顔をだす。バザールの生きた姿は、人間的といえれば人間的すぎる程、俗なる迫力で出現する。どう見ても尋常なるプロセスで輸入されたものではなさそう。品々まで、堂々と店先に置いてある。鉄砲も買える。羊も買える。ニコンのカメラもある。麻

葉さえ取り引きされる。妖しい宝石の輝きも路地の奥に潜んでいる。ありとあらゆるものが、このバザールで動いているのだ。無定形だが、バイタルな欲望の塊のようなうねりが、内臓器のように曲がつたバザールの街路で消化されてゆくのだ。

中村さんの住むダブガリからナマック・マンデ



イまで歩いてきた。今日はナマック・マンデイからペシャワール旧市街の中心、キツサハニ(語り部)バザールまで歩いてみよう。午前中のバザールは偵察だ。だいたい値踏みをしておくのだ。ダブガリから歩いた道をそのまますすぐナマック・マンデイの交差点を横切り、すこし歩くと左に曲がる小路がある。この北へ延びる道が、旧市街中心地への近道だ。

人と動物程しか通れない道の両側に、ぎつしりと革サングルの小売店が並ぶ。これをツアプリという。これはパシードン族の民族靴でもある。ひとつ物色する。八〇ルピーという。まあまあだが六、七〇と値踏みしながら先をいそぐ。百メートルもいくと右に折れる道がある。今度は帽子屋街だ。ベレー帽のような、また見方を変えればキノコのような風変わりなウール素材のものが軒先にかけてられている。街の人はここをチトラルバザールという。ペシャワールの北方、ヒンズークシユの地域をチトラルといい、その周辺の人々が愛用する帽子だ。これもペシャワールのポピュラーな帽子となつている。三〇ルピーを二五ルピーに値切る。その帽子を頭にのせ、この小道をぬけると、旧市街のメインロードにぶつかり、右に行けばもうそこはキツサハニ・バザールの入口である。

大通りはキツサハニの入口で九〇度曲がついている。キツサハニの入口は銅細工の店ではじまる。銅の皿、銅の水差し、サモワール、水パイプ、ヤ

カンなど銅器がにぶい光を放つ。すれた店主がハローノホット・ドゥー・ユー・ウォントゥなど失礼な呼び込みをするのだ。そういうのは無視して、右に曲がり布地街に足を運ぶ。ここでペシャワールの服を仕立てることにする。色々な布地がある。一番高いのが日本製だ。人気もある。少々がっくりしながら、化学繊維の生地を六メートル九〇ルピーで買う。布地はけっこう高いのだ。裏にあるテラーで、カミース(シャツ)、パルトウグ(ズボン)を三〇ルピーで作ってもらう。主人は三日後にできあがると約束する。面白いことにペシャワールでは、既製の服よりオーダーメイドの方が安いのだ。

布地街を抜けるとキツサハニの中心だ。チョークヤードガル(交叉点に記念碑が立っておりそれが地名となっている)である。ここには両替商がちらちらといる。正規のものか、それともブラックなのか理解に苦しむが、とにかくそこでおおっぴらに他国通貨とパキスタンルピーが交換されるのだ。五〇ドルが七五〇ルピーになった。

ここでひとまずホテルにもどろう。帰りに値踏みしておいた革サンダルを七〇ルピーで買って帰る。これで三日後には服もでき、帽子も服も、サンダルもペシャワール人ほくなつていくのだ。そんな気分を秘かに楽しむバザールの買物である。

(つづく)



宮崎伸子さん

略歴 長崎県諫早市生れ 諫早高校・長崎大学医学部看護学校・同助産婦学校卒 八一年(昭五六年)九月からネパール医療協力 宮崎さんはカトマンズ郊外のアナンダバン・ハンセン病院で奉仕している。ネパールのハンセン病患者は七〇万人(日本は約一万人)といわれている。アナンダバン病院はネパールに二つしかないハンセン病の専門病院の一つである。

主の御名を讃美します。

五月というのに、雨季の始めのように二三日ごとに、雷を伴った雨が降っています。昨夜は、約一時間くらい風雨とあらがれが吹きあられ、丁度トタン屋根の集会所にいましたので、耳をつんざくようなものすごい音にびっくりしてしまいました。

チャパガオンからアナンダバンへの道は、すでに危険な状態です。これは山の中腹から岩石を採掘していることによるのです。木を切るだけではのたりず石を掘り出しているのです。トラックによつて道は壊され、山は山くずれを起こしています。先週の木曜日にととうと犠牲者が出ました。病院のスタッフの奥さんが亡くなりました。彼女はチャパガオンへ行く途中土砂くずれに会いました。村人たちが、すでに何度も採掘をやめさせるようにと陳情しているようですが、聞き入れられません。人間の欲望が自然を破壊し、人の命まで奪っています。事故のあった翌朝も、他の採掘場でダイナマイトが鳴りひびいていました。

病院のほうは、ひとりのD.H.に慣れ、比較的スムーズに仕事はなされています。五月から、今まで中央材料室(器械・器具を消毒、滅菌する所)

「JOCs」のワーカー達

で働いていたD.H.(ベティ)さんを病棟へ引っぱり、病棟の仕事を教えています。彼女は、勉強する意欲満々で、英語の読み書きに専念しています。看護のことはタンセンで訓練を受けた人ですが、五年間のギャップをうめることと、アナンダバンレプロシイのことを重点的に教えるつもりです。

いずれはひとつの病棟の責任を持ってもらう予定です。私事ですが、イースターの翌日から右腕が腫れよう炎を起こしているようで、鎮痛剤を服用していますが、薬が効いている間は少々の痛みはありません。五週間良くもならず悪くもならずという状態です。身体の一部に痛みを感じつつこれほど長くすごしたのは初めてです。この手紙が皆様の手許に届くころには、良くなっていることを祈っています。

祈りの課題
一、道路が危険な状態です。これ以上事故がありませんように。特に病院の車が毎日カトマンズへ出ていますので、その安全のために。

二、Bettyさんの病棟での学びの上に。

三、私の右腕が一日も早くよくなりますように。(祈りの手紙四〇号より)

石原 新

地球の自然が、我々の考える、勝手な、思い違いで、自然で無くなるうとして居るのです。地球の砂漠化は進んで居るのです。一億万年と云う、長い間、維持されて来た地球が、ここ数拾年の間に自然で無くなるうとして居るのです。人間にも、云える様に思えるのですが……。化学物質を作り出し、自分中心的な、構想を作り出し、人間のロボット化になろうとして居るのです。

毎日の新聞紙上を見ると解るように、生命も金に変えようとするのです。全知能を使って自分の為に、自分中心に自分の都合の為に毎日を暮して居るのです。自然との関わりも、強い者中心、

人間中心となり、自然と人間の砂漠化も始まって居るのです。物質文化を夢見た、我々人間の為に、家族、夫婦、親子まで、共同体としての思いやりの心まで無くなるうとして居るのです。経済的に楽な暮らしを誰れもが考えて居るのです。人の考える欲の為に、あの人よりも自分が、となり、経済的にも得をしたいのです。声の大きい者が、力の強い者が中心となり、金持になりたいのです。人間が、人間の為に作り出した、金の為に戦争迄するのです。心を無くした、ロボット人間と化して居るのです。淋しいですね。助け合いと云う、言葉も、努力も、されて居るのですが。

地球に住む、動植物すべて同志である事を知らなければなりません。人間同志の戦いを無くし、助け合う世の中になければ、出来ないのですね。解っては居るのですが……。

菊水丸太村では、人の輪と云う事を大切にしていきたいと思つて居ります。

熊本は燃えている

「ペシャワール会との出会い」

原田 敏 幸

ペシャワール会を知ったのは、佐藤誠さんとの出会いからである。民間の市民集会、熊本市民祭の打上げの日、佐藤誠さんがおられた。

われわれはアジア、アフリカ研究会を持っていたがペシャワール会に関わるようになって、ペシャワール会が主流になりつつある。昨年の一回目の集まりは十名余であった。

本年は、日本基督教団、熊本白川教会、婦人会、

幼稚園主催で中村哲氏の講演があった。良い集りであった。パキスタンの北西部に於けるハンセン病への奉仕のすさまじさを知らされ、イメージの強烈さに圧倒された。わたしたちは世界の地域問題を考え、第三世界の貧困、飢餓病気の実情を知り、日本に少ないと言われる「奉仕の精神」に学びたいと思つている。



映画「注目すべき人々との出会い」

講演「鬼子母神のアジア」

福岡中央市民センター 4月18日・19日

前売券¥1200— 当日券¥1500—○チケットは市内の有名プレイガイドにて発売中!

18日 土	<映画>	<映画>
	PM 3:30-5:20	PM 6:00-7:50
19日 日	<映画>	<講演>
	PM 1:00-2:50	PM 3:30-5:20 PM 6:00-7:30

皆様のおかげで、私達の当面の目標であった巡回診療車もようやく送ることができるようになりました。皆様に心より感謝いたします。数ヶ月後には、カラコルムの山中や、アフガン難民キャンプの中を力強く走りまわることでしょう。

さて、中村医師が、ペシャワールに赴任して約3年となりますが、会員の方より中村医師の活動しているペシャワールについて知りたいとの希望がありました。又、中村医師からも「自分も単に支援するのではなく、アジアを理解するための道具として欲しい」旨の考えを何度も聞いております。



このような意見と、私達ペシャワール会の活動をより多くの方に知っていただく目的で「アジア世界との出会い」としてこの度映画、講演会を催します。多くの会員の皆様の来演を期待します。

尚、この映画、講演における経済的負担は、同じように中村医師の活動に触発されて活動している(株)酔胡社が負担してくれることになっていま

す。黒字になればペシャワール会に寄付される予定です。

映画 「注目すべき人々との出会い」

現在、東京銀座セゾン劇場にて、自らの劇団を率いて公演中のヨーロッパ最高の演出家の一人、ピーター・ブルックが監督した、思想家グルジェフの半生を描く作品。

この映画は全編アフガニスタンでロケが行なわれ、そこは中村医師の活動するパキスタン北西辺境州と民族的、文化的に共通する点が多く、現地の風俗、人々の思考や生活を理解する上で非常に役立つと思われます。

映画は、青年グルジェフが生きることの意味を求め、西アジア各地を旅する事で、同じように旅する思想家との出会いを描いたものです。この映画は1979年度ヨーロッパ・フィルム・フェスティバルにて、最優秀音楽賞と最優秀撮影賞を受け、高い評価を得ました。

講演 「鬼子母神のアジア」

講師 松 枝 至

鬼子母神は、生まれたばかりの赤子を喰べる子連れれの鬼女であった。それをあわれに思った釈迦は、鬼子母の子を隠すことで、鬼子母に母の子に対する憶いを理解させた。以後鬼子母は、子供の守る神として釈迦につかえることになったという。この逸話が生まれたのは、中村医師の活動の場のペシャワールであるという。このように、アジアには従来から語られてきた貧しく暗い混んとした社会という見方とは別の、寛容で、いろいろな思想の根源という考え方が確立されつつある。

今回の講演ではいろいろな資料を用い、アジアとの出会いとして、美術史の方から語ってもらう。

レプロシーエディケーション ファンドについて

念願の巡回診療車につきましては、前号にてお知らせしましたとおり、皆様のご支援・三菱商事(株)のご厚意により現地へ送ることができました。ご支援下さいました多くの方々深く感謝致します。

ペシャワールでは、中村医師の診療活動と併せ、患者自身が軽快後、理学療法士、あるいは靴職人及びその助手として働くことにより、医療活動の拡大と彼ら自身への自活への道が拓かれつつありますが、トレーニング費用が不足しているのが実状です。

彼らの技術修得のための費用を補助する基金を設立することを、ジープキャンペーンの次の目標として掲げたく存じます。

皆様方のご理解とご協力をお願いします。詳しくは、次号にてお知らせします。

事務局

* * *



会計からのお知らせ (入金について)

十二月	個人百七十五人	団体三件 一〇一万七千九百円
一月	個人・五十四人	団体八件 五十九万一千三十三円
二月	個人 二十八人	団体三件 二十九万二千九百六円

※ありがとうございます。今後ともよろしくお願ひします。

会 則

- ①本会の名称をペシャワール会とする。
- ②本会は、JOCSの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③本会は、派遣母体であるJOCSを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。⑤会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑥本会は会誌の発行を行い、会員は会の拡大に努める。
- ⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨本会の事務局を福岡YMCA (〒八二〇 福岡市中央区大名一―二一八 ☎七八一―七四二〇) 内におく。